

の可憐さを貴方も汲み取って、どうかね、五日の後すぐく歸って來ても頭上から吐らないやうに」

「黒田さん、良人を吐りつける妻がありますか」

「や、失敬々々、過言の至極、つい言葉が誤ったのですから、しかし事實は只今の」

「いえ、よく分つて居ります、居りますがね黒田さん、ちよいと貴君、其時さう仰しやツて下されば宜いに、さうすりやア、あの良人に五日間また無駄な苦勞もさせず何とか心持よく引き留める方便も御坐いましたもの、しかし過ぎ去った事ですから、こりやア御不足を申し上げるんでないの、たゞ妾の愚癡を並べたばかり、ね黒田さん、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ」

「何だか妙に、薄氣味の悪い笑ひやうですな」

「おや何故、氣味がお悪いの」

「いや、どうも、これは重ね重ねの失敗」

「時に黒田さん、もう此上は良人を諫言するのに口舌では致しません決心、その五日の間に妾は妾だけの料簡で、ついでに貴君に看板を書いて戴きたいの、良人の相談に乗った貴君ですから、また妾の相談にも乗って下さるでせうね」

「しかし、それぢやア内股膏藥で、僕が何だか上田を出し抜くやうに當るこつちやア無いんですか」

「そりやア、さうなりますさ、しかし貴君お嫌ですか」

「いや何、別に嫌とも」

「ぢやア書いて下さい、ね、きつと頼みますよ、ありがたう今から御禮を申して置きます」

なるほど顔は焼跡の金糞なれど心は磨き抜いたる名玉、姿は泥田を泳ぐ家鴨に似たれど氣は松上の鶴に等しき女ぞと、さすがの黒田健次も感に堪へし其翌日より、俄に人の出入り繁く果は丁々と鑿の音さへ聞えしかば、おもはず眉を蹙めて寢床を這ひ出でつゝ、二階の降口に伏して階下を差覗けば、いつの間は何として用意しけん、大工と手傳ひ四五人が向鉢巻の大働き、お清は襷片手に四邊を見廻して頻りに普請の指圖しながら、まづ門口の格子戸ぶちぬいて商賣の店を開かんとする體に、黒田いよゝゝ驚き呆れて舌を巻きぬ、

もう此上は口前ばかりの諫言するより、五日の間に妾は妾だけの料簡ありと言ひしは昨日の夕方、その舌の根の乾かぬ今日はやこゝに斯くの體、氣の利いたる男とて斯うも鋭く立廻らぬ浮世に、さてもく天晴の女、なるほど身は下女風情より出でたれど凡俗に用なき上田を承知で連れ添ひしだけの女なりけりと、今更ら首を縮めて恐れ入

りぬ、

普請の始まりし日より三度の食を運ぶにも、お清さらに二階へ上り來ず、たゞ首と手のみ梯子段に現しながら、黒田さん忙しいから御免なさいといふや否、忽然すつと降り行く體に、どうして何日から何をすると問ふ違なく、たゞ顔見らるゝさへ面目なき心地して打過ぎしが、三日目の正午ごろ、やうく枕頭に近づき來りて微笑を浮べながら、

「この兩三日は大變に失禮ばかり致しました、さぞ騒がしう御坐いましたらう、しかし、どうか斯うか形容だけの普請も出來上りまして、明日から小賣店を出さうと思つて居ますの、つきましては、お約束ですから御病中なほさら恐れ入りますが、この看板を書いて下さいな、看板は三枚ですよ、一枚は煙草の小賣店で、一枚は齒磨やら楊枝やら石鹼やら其外いろゝの雜とした日用品の小間物類、も一枚は着類の

仕立物をする看板ですから、其お心算で都合よく一目に誰でも直ぐ分るやうに願ひます」

いひつゝ、四尺長二枚と一尺ばかりの檜板一枚に、はや墨磨り込みし硯と筆を添へて差出せば、健次たゞ無言に起き直つて閉口頓首の體、

「あれ、お嫌なんですか」

「決して、さら／＼左様な儀でなし、どうも實に、全く貴女にやア驚きました、もはや何とも申しません、恐れ入りました、恐縮々々」

「何ですよ黒田さん、戲談は儲おいて、どうか早く」

「さらぬだに病後の拙筆ですが、うろ／＼狼狽へて呵しな卑下をする場合でないから、たゞ命これ従ふのみ、謹んで書きます、書きますがね細君、上田が歸つたら、さぞ驚愕しませうな、その呆れて驚いた顔が今から見ると、いかにも可哀さうで

す」

「何が貴君、萬事あの良人のためです」

「ですから別に貴女がお悪いといふんぢやアない、たゞ上田が可哀さうだと」

「さう貴方のやうに、ぐ／＼文句を仰しやるなら、もう頼みません」

「や、細君、そりやア貴女、いえさ、書きますよ、書きますとも、只今すぐ、しかし驚いた、いかにも恐縮、上田のみか、この黒田の如きも今更ら往事を回顧すれば半文の價値なし、あゝ無効だ、慚愧々々」

上田が立出でしより今日は五日目と、黒田健次おのが身の病を忘れて寢床を這ひ出でつゝ、をり／＼二階の窓に首さし出しながら、しきりに往來を打眺めて今や歸るか、今か／＼と其日の正午過ぎまで待ちしが、さらに影なし、

さては必定また五日間の無駄骨に終りしか、十日間この四里四方を駈け廻ッて艱難辛
 苦の果が辻占賣しかも只の一枚さへ得賣らぬ上田が腕としては、よしや血眼になつて
 立騒げばとて、よしや如何なる業を見付け出せしにせよ、とても覺束なき浮世の浪風に
 對うての舵柄やうく生命からぐ漕ぎ戻るや否、俄に變り果てたる我家の軒端に、
 あツと呆れて嘸や驚かん、あの二十貫目の大兵すごく凋れ返りて妻への口上、おも
 へば哀れなりと、また這ひ出でて窓より差覗けば、をりしも彼方より歩み來る上田が
 姿ちらと見えぬ、

かくとも知らぬ上田先生、あはれや五日間の砂埃塵に塗れて駈け廻りし甲斐もなく、
 木賃宿の夢さへ安からざりし苦心も水の泡と消え果て、残るは五體の疲勞と心の面
 目なさ、無宿の乞食小僧も朝の一時に一日の饑餓を凌ぐと聞き及ぶ世の中を、世間な
 みくくに勝れし大の男が五日目の今更ら此ま、家に歸りて何とやいはん、あれほど事

を分け理を押しして諫めし妻が手前、どの面さけて門の闕を越えんかと、流石に平生の
 悠々寛々たる勢ひもなく、たゞ悄然として歩み來りしが、ふと見れば今までの格子戸
 半窓がらりと打抜いて、おもひも寄らぬ煙草の小賣店、さては日用の小間物類を飾り
 立てたる體に、もしや門違ひかと思へども正しく我家、さりとして俄に斯くなるべき筈
 は無し、夢か今は白晝、うつゝか我こゝにありと、兩眼の瞳子を定めて猶よく見れば
 新しき看板に見覚えのある黒田の筆跡、ふ々を書き並べたる其下に上田きよ、
 はツと驚き呆れて身を潜めつゝ足を爪立て、差覗けば、店の小影に妻のお清が姿、ち
 らと見ゆるや否、また忽然ぎよツと震ひあがッて、一二間おもはず遁け出しぬ、
 二階の窓より斯くと見たる黒田は頻りに首さし伸べて手を振りつゝ、委細かまはず其
 ま、ずツと這入れ、萬事は乃公の胸に一策、もし山の神の荒れ模様あれば祈り靜める
 工夫もありと口には言ひたけれど聲を出さば忽ち階下への露顯、たゞ氣ばかり揉んで

焦慮りしが、ふと思ひついて土瓶の水を屋根に流せば、たら〜と軒端より落ち下る
 栗の音に上田おもはず見上ぐる顔と顔、互に目と手を動かして啞の争ふが如し、
 お清は店の小影に坐しながら、片手間の針仕事に餘念なかりしが、時ならぬに軒より
 落つる栗の音、はて不思議と身を起して何心なく外方を見れば、かくとも知らぬ良人
 が隣屋の軒下に立ッて頻りに打仰ぎつゝ手を振り首を振る體、さてはと今更に呵しく
 吹き出さんとせしを奥齒に咬み殺して、そのまゝ内に入り二階の梯子口より聲高く、
 「黒田さん、ちよいと急用で横町まで往ッて來ますから、御病中お氣の毒ですが、ど
 うかね、そろツと降りて店番をして下さいな」
 きくや否、黒田は得たりと思はず横手を拍ちしが、はツと心付いて俄の咳に紛らしな
 がら、
 「や、心得た、承知しました、今すぐに降ります、大丈夫、すぐに降りますよ」

お清、わざと良人の方を見返りもせず、すツと其まゝ立出でて四軒目の横丁へ曲りし
 姿を、黒田やう〜見送りて此方を振り向けば、なほ上田は二階の窓を仰いで我を待
 つ體、
 「おい上田、僕は此處だよ、はやく這入れ、何、妻君か、そりやア今それ、その横町
 まで出掛けて往ッたから、この間に早くさ」
 「畜生、虚言をいへ、つい今まで、その店頭に居ッたぢやアないか」
 「は、は、は、は、君は二階ばかりに氣を取られて居ッたからだ、ちよいと用があるツて
 僕に店番を仰せ付けられて今そこへ出たばかりさ」
 上田かくと聞くや否、さては此機を失ふべからずと、そのまゝ走り込んで今更ら四邊
 を見廻しながら、ほツと太息ついて目を圓くし、
 「おい黒田、實に桑田碧海の世諺、浦島太郎の里歸りと一般だ、こりやア全體どうし

をりしも隣屋の婆に何か挨拶の聲は正しくお清の歸り來りし體、それといふ間もなく、はッと驚いて思はず二階へ駆け上りし上田の體、今更ら聲たて、呼び下しもならぬ面前へ、はやお清が姿あらはれて、

「黒田さん、御苦勞さま、さア二階で、お憩み下さい」

上田奴こゝに此まゝ居れば却つて事の易きを、あまり正直に狼狽へ過ぎて遁け上つたる今更、黒田も調子外れて其まゝ無言に二階へ上り行きつゝ、まづ梯子段より首差伸べて見れば梟の如き目を圓くして片隅に身を縮めたる上田の顔色、しきりに手を振り聲を潜めて、

「おい黒田、いよく歸つて來たな」

「來たさ、來たつて君、あのまゝ平氣で居れば宜いに、却つて都合が悪いよ」

「だって、何だか變だ、妙に驚いてね、我知らずさ」

「第一に僕が困るよ、また不在中に君を二階へ上げて置いたと、いはれるのが辛いよ」

「しかし黒田、降りて往つて何とか挨拶してくれよ」

「するさ、どうせ、せすにやア居られんこつたがね、あんまり工合が呵しいよ、何だか出し抜いて拵へたやうで」

をりしも階下よりお清の聲、

「おや黒田さん、貴君のお客様ですか、ほしやく二階の談話聲は」

南無三寶、それ見ろといはぬばかりに上田を睨みつけて、そのまゝ梯子の降口に例の如く這ひ出しながら、

「いや、僕の客ぢやア御坐いませんが、實は細君、貴女の、大切な、お客様でね」

「妾の客、誰のこつてす、いつの間に二階へ、なるほど脱ぎ捨て、ある下駄に見覚え

のない事も御坐いませんがね、ちよいと今、思ひ出せませんの、全體、何といふ名前の人です」

「こりやア恐れ入りましたな、その姓名の儀は、ですがね細君、下駄に見覚えがある
と仰しやれば、まさか知らない他人の間柄でも御坐いますまいから、どうか其邊は
お手柔かに寛大の處置を願へませんか、たゞの奴なら僕が摺り下して御面前へ出る
筈ですがね、何を申すも世間並を外れた大變な重荷で、二十貫といやア迎も病人の
僕が力で叶ひませんから、おい上田、こゝだ、こゝだ、こゝだ、もう斯うなりやア君の
領分だ、はやく現れて直談判をしろよ」

上田も今は絶體絶命、やうく片隅より這ひ出でて黒田と共に面を並べながら、しきりに階下を差覗いて、

「おい、乃公だよ、御免下さい、この乃公だよ、御免下さい」

「乃公だくでは分りません、また御免々と何を謝ッて在らッしやるの」

「困るなア、もう降参したから、どうか無事に下してくれよ」

「左様、其聲も聞き覚えのあるやうですワ」

「貴女さまの御厄介になつて居ります奴で、上田力と申す馬鹿野郎、實際、はや何とも申譯のない、怪しからん奴なんで」

其八

かねて川上の妻女より貰ひ受けたる金の效驗この時なりと、お清その金を携へて眞一
文字に濱町へ駆け込めば、川上夫婦も手を拍ツて膝を乗り出しつゝ、得たりかしこし
上田を諫めて黒田の鼻柱へし折るべき好機會ぞと、俄に出入の煙草屋を呼び寄せ横町
の小間物屋に人を馳せて、もし萬一の事あらば當家で引き受けんとの一言に、淨世と

金は廻り持ちの諺、さらば品物の賣上げ次第にて支拂ふべき約束を固め、例の金は其まゝ持つて歸りて店の小普請に費ひしのみ、なほ半分以上はお清の懐中に残りて三月越しの用意、たとひ一品を賣らずとも俄に落城せぬ計算あれば、どこまでも平氣に濟まし込んだる妻が顔色を、見るにつけ思ふにつけて上田が不思議さ訝かしさ、いかに首を捻ぢ曲けても更に手品の種を見出し難し、

下女とはいへ濱町の臺所一切を引き受けて七年越しの臍線金、身分不相應にありしかど、そもく新婚旅行を洒落れ過ぎて出雲三界まで押し出せし時、すでに費ひ果して今日までの日用雜費さへ、よくも續きしと思ふほどの今更、また衣類は世間なみくの輕き嫁入沙汰よりも多く持てども、其衣類は葛籠の數といひ底も重けに一枚も失はざる體、さては川上夫婦の外に金の出どころなしと十中の八九まで覘ひは定まりながら、二度の失敗を重ねて言句も無き折柄、それかと斬り込んで問ふべき勇氣も無く、

また不意に川上夫婦を襲うて詰らんとすれば、最初の大言に恥ぢ再び訪はぬといひし誓約に恥ぢて、さすがの上田先生も二十貫目の大兵を縮めつゝ、登音しのばせ二階へ遁け上ツて黒田に對ひながら、

「おい困ツたよ、まだ何だか御機嫌が直らないやうだぜ」

「はゝゝゝゝ、あんまり君は人が善過ぎるよ、今日で二日目だらう、その間に君、ゆうべ一夜の活動場所があるぢやアないか、いくら怒ツたツて女だ、いくら面目玉を踏み潰したツて男だ、ね、その女が女房で其男が亭主で、一夜を越して何のこツた腕が無さ過ぎるぢやアないか、そかア君、夫婦の情合で、はゝゝゝゝ、何とかないりさうなもんだ、旨く誤魔化して仕舞へば宜いに」

「ばゝ馬鹿、貴様と乃公とは」

「何、違ふもんか、他の事は違ツても、こればかりは君」

人が歸ッてから二日目、しかも朝からの雨天で今あの通り降り出しましたらう、それに良人、一圓三十八錢七厘といふ店賣がありましたよ、ちやんと樂に平氣で坐ッて居て、おまけに片手間で針仕事をして居ながら、ね、薄闇の四時間も吐鳴り歩いて只の一枚も賣れなかつた良人の辻占よりかア、よほど割合が宜くツて、面白いでせし。

「恐縮々々、どうも、はや、何とも申譯が、ねエおい、乃公は何故こんな間に間拔けてるだらう、あゝいけない、逆も無効だ、天生の馬鹿だな此奴ア」

「ほゝゝゝゝ、少しは氣がつかましたかね、うき世を渡る道はまた格別といふ事」

「ついた、氣が付いたどころか、皮を破り肉に喰ひ込み骨に刻んで腸に染み渡つたよ」

「ですから以來、良人ア何もなさらないで、じつとして在らッしやいよ、過日もいふ

通り男は男で、こゝといふ男の活動場所が、また外にもありますからね」

「一言なし、閉口々々、しかし和女、よくまア斯う急に出來たもんだな、實に驚いたぜ、ふいと何心なく歸ッて來た時にやア」

「ほゝゝゝゝこゝが浮世の綱渡りといふもんですから、しばらく羽織きて見物なさい」

「なるほど、だが和女、どうして」

「さう良人のやうに、こんな小さな事を、いちく」

「ちやア聞かない、聞かない、たゞ見物して有難く思ツてるがね、はゝゝゝゝわからないなア世の中の俗事は」

「その分らない俗事が良人、女の小股走りといふもんですよ、立派に分り切つた人に感心さすのは男の本藝、ね、よろしいか」

「む、しかし妙だ」

「ほ、ほ、ほ、その妙な中から今夜ア、ちよいと御馳走してあげませう、あの黒田さんも呼び下してね、ついでに黒田さんへ言ッてあける事が御坐いますワ」

「いやもう大抵なら許してやれ、さすがの彼奴も和女には舌を巻いて避易してるさ」

「なアに良人、黒田さんをいぢめるンぢやア無いンですよ」

「さうか、それなら宜いが、彼奴、何だか頻りにびく／＼してるぜ、和女の聲がする」と

「ほ、ほ、ほ、聞き及ぶお島さんとやらにも、それほど氣兼ねなすツた方ですかねエ黒田さんは」

「ところが彼奴、その時分なか／＼の横着野郎で、お島といふ女は實に可哀さうだツたよ、しかし今まで生きて居れば、まさか、あゝまで苦勞はさし居るまいて、つま

り自分の大病と其お島の死んだので、前後こゝに殆ど別種の人間になツてるからな

ア、あまりお島の事をいうてやるな、あれでも泣くよ、男泣きに」

「もし妾が、そのお島さんのやうに、死にでもしたら良人どうなさいます」

「え、馬鹿な、生きてるもんか馬鹿なツ」

其九

女の浮世沙汰は男の大道業よりも得て勝利のあるもの、絶え間なき小雨と小商賣は自然に家の潤澤となりて、溜らねど乾かぬ内證の獨笑み、ましてお清は顔こそ二の町なれ心の優しさと言葉の愛敬に人を外さねば、いつしか客足ついて照り降りなしの日に二圓は一文も缺かさず、そのうちの煙草に一割と齒磨き楊枝の類に二割五分とすれば、七十錢の利益は店番しながら片手間の仕立物を合はして九十錢、三九二十七圓で馴れ

し世帯の小器用なる三人暮しは却つて天下太平、これくくと出入帳を鼻頭に突き付けられて上田先生いよく閉口頓首、悲しいかな大聲は俚耳に入らず大智は小人に解せられず、あゝ俗世の俗事は俗物の俗才に限るといひしを、ぐつとお清に睨まれて、忽然すつと首を締めぬ、

されどまだ小女郎一人を置くほどの身代ならねば、三度の食事もお清みづから手を下す間の店番に、ちよいと良人と上田先生をりく押し出されて思はず目を丸くすれば、辻占を吐鳴り歩くよりは人品ですよと一本まるられて、ぎゆうの音も出でず、おい黒田、貴様も降りて来いと友を呼ぶや否、いえ不可ません黒田さんは加減知らずの煙草好ですといはれて、黒田おもはず二階に獨り面を膨らしながら、さて一言も得いはぬ心中、乃公が直接に盗むもんかい、うぬが亭主を欺して貰ふばかりだい、

上田と黒田と二人のみならば、芋蟲と蟋蟀との冬籠り、太いも細いも何の役には立た

で忽ち落城すべき筈の年の暮も、お清たゞ一人の活動に門松の翠色も世間體の餅も屠蘇も整うて、いつの間に仕立てたやら木綿なれど新しき羽織と着物、また病人には古けれど裏地に絹の柔かきを用ひて綿さへ更に多く入れたるを差出せば、上田も黒田も互に顔を見合はせて目に涙、逆も野郎は無効だねエ、

例に依つて例の如き上田ならば洒々落々、さらに何の仔細もなければ、あはれ今は浮世に妻帯の身として、しかも辻占の失敗以來、何とやら我みづから我心に咎められつつ、この三月ばかりは絶えて訪はざりしが、年たちかへる新玉の春の壽詞とて、一月の三日、始めて濱町の川上が許へ出で行きぬ、

川上夫婦かくと聞いて、かざり立てたる客室よりも心易けに奥の一室へ導きつゝ、殊更に山海の珍味を積んで左右より厚遇せば、上田なほさら恐縮の體、

り今までの上田さんで在らッしやいよ、第一をりく、貴君が来て下さらないと何だか淋しくッて、調子が沈んで陰気で不可ませんわ、つい失禮だと思ひながら、久しいお馴染だし平生お心易いもんですから、夫婦も樂屋を打明けての面白をかしい事は、貴君ばかりに申すんですもの、ほ、ほ、ほ、今日は上田さん、どんな事があつても歸しませんよ、去年、秋の末から歳暮へかけて三月越しの水臭い事を遊ばしたから、その復仇に、さア御酒でも召上れ、良人その大きな、い、え其方の其お盃を「や、こりやア細君、新年早々から酷いですな、僕だつて、わざと無沙汰する心算でもなかつたんですが、つい、その、は、は、は、何だか妙に鬨が高くッて、やアこの大盃を川上、僕には、全體いくら、え、三合半の飾り盃たア驚いたな、ちよッ仕方がない飲め、しかし妙さねエ、當家へ来ると上田は矢張り例に依ッて例の如しだ、何故だらう、忽ち俗塵の一切萬事を忘れて人間を脱却したるの心地、は、は、は、

人間を外れた奴だから始末に終へない厄介物だ、ねエ細君、わけて貴女にやア久しい厄介をかけましたな、また今年の厄介ついでに御苦勞ながら、ついだくお酌を、なみくくと注ぎ候へ黄金の色の凸とならんまで」

「おや上田さん、先刻、入らッした時、どうも變だと思ッて實は心配して居りましたに、そろく元氣が出て來ましたことね」

「なアに元氣が出て來たンぢやアない、これが元來の地です、しかし哀れむべし妻帯以來、この上田もね、をりくこの木地を隠すやうな事がありますよ」

「おや、どうして、どんなところで」

「は、は、は、それは言はぬが花ぢやと、申すこッてすよ」

一月も過ぎ二月も夢うつ、ざんざめきし浮世の春も暮れ行く四月の末より、はや五月の梢に残んの花ちらほらと青葉まじりの杜鵑、その初聲は聴かずとも小唄にうたふ衣更、身さへ輕けの世間に引き代へて、こゝにお清は次第に身重く成り行きつゝ、はや七月目の今日このごろは朝夕の起居さへ苦しげに溜息つきながら、なほ店番やら食事やら身一個に掻き集めての忙しさを見るにつけ思ふにつけて、これも我ゆゑかといふ事に罪を犯せし心地、好きな酒さへ一滴も得飲まで獨り何をか思ひ煩ひぬ、されど二階の黒田が疾病いつしか薄らぎて、もはや生命は我物、只この上は病後の養生專一と請合ひし醫者の言葉に、かくとなれば身よりも心なほさら元來の張り切つたる男、勢ひに乗じて宛ら追風に帆をあけしが如く、わづか一月ばかりのうちに朝夕めきくと目に立ちて癒えしかば、せめての手助けと我から進んで上田もろとも、交る交る店番はすれども、をりく言葉の端に客を怒らして空しく取遁し、さては代價を

間違うて返しもならぬ損を招く體に、お清いよく氣を揉んで寸隙もなく立働きぬ、良人にして良人の甲斐なき我、やがて子を生めば父として父の功なき我、たゞ此身一個さへ妻の手前いと心苦しきに、あの黒田までを脊負ひ込んでの苦勞をかけ、大の男が二人も居ながら何の用にも立たず、はや臨月に程もない妊婦を立働かして、こゝに寝て喰ふばかりの我等そもく冥加に過ぎたりと、日を逐うて次第に身重くなりし妻を見れば、こゝに我を責め來る浮世の枷かと思はれぬ、はや店も閉ぢ夕飯も濟み果てしかば、黒田は身の運動を兼ねて醫者の許まで出で行きつゝ、夫婦たゞ二人の差對ひに火鉢を隔て、見るともなしに妻が腹部ちらと見遣りながら、さも氣の毒けの體に眉を擧めて、
「ねエおい、よほど苦しいやうだなア、随分、つらいこつたらうなア、こゝ一二個月前までは、さうも目立たなかつたが、此頃ちやア毎日々々、見るたんびに膨れ出して

来るやうで、何だか物に追ッかけられるやうな心持がして、第一、和女に氣の毒でならないよ」

「ほ、今更ら良人、そんな事を言ッたッて、出て仕舞はなきやア此ま、引ッ込むもンぢやアなし、追ッかけられるやうな心持がしても、まさか降ッて湧いた物でもなし、たしかに覺えのある事ですから貴君、仕様がありますまいよ」

「は、仕様がなごころか、固より持舞雀躍して大に仕様あらんと欲すれどもさ、かくの通りの乃公で、和女に對し、また出来る子に對しても、實ア申譯がないよ、ねエ、無能力の良人、さらに親甲斐もない父で」

「何ですよウ、つまらない、愚癡ッほい、男らしくもない、妙に良人ア此ごろ退けて在らッしやるよ、子寶と言ッて金や贅澤で買へない大切なものが生れる矢前、そんな退け込んだ愚癡な言ふもンぢやア御坐いませんよ、その體軀だけの元氣を出

して威勢よくなさい、はきくとして下さい、子は親の勢ひで生れ妻は良人の力で安産するといふくらゐですから、時に良人、もし女の子なら何といひませう、もし男なら何と名をつけませうねエ、もう八月の末、來月だけですよ、どうか斯うか起きて居て自由になるのは、十月目の臨月は女の大役、大業にいへば生死の境ですもの、なほさら良人、しッかりして、こゝでこそ例の上田一流、まッたくですよ」

「いや、和女のやうに、さう言はれると乃公も少しは心丈夫になッて、元氣も出るがね、その苦しうな身重の和女一人を働かしてよ、乃公といひ黒田といひ、大の野郎が二人まで何の役にも立たないかと思やア」

「ほ、またそれ、そこが良方の感違ひですよ、世帯の事は一切、氣にかけないで在らッしやると善いに、たとひ小さな店でも、あゝしてさへ置けば喰ふに困る筈はなしさ、來月にもなれば備ひ婆さんを置く事も、ちやんと極めてあるンですから、

萬事、安心して在らッしやい、うまれる子が大切ですもの、その子に觸るまで働けと言ッても働きやアしませんさ」

「む、さうか、來月になりやア備ひ婆を」

「ですとも、横町の八百屋に田舎から來て厄介の婆さんを頼む筈に極めてあるんです、しかし店だけは、お嫌でせうが黒田さんと良人と、交り番ここにねエ」

「や、承知、心得た」

「いえさ、さう安請合ぢやア却ッて困ります、なるほど、過日も店番はして下さいましたが、あんな良人、お客を捉へて喧嘩腰になツたり、五錢の物を三錢に賣ツたり七錢の剩餘を狼狽へて十錢銀貨を出したり、あれぢやア良人、いえさ第一、お二人とも言葉が粗畧過ぎて横柄ですよ、黒田さんは、まだ世上に擦れて在らッしやるから少しは如才の無いところもあります、良人と來ちやア、ほ、ほ、ほ、まるで方なし、

お客に對ッて、おい君なンざア不可ませんよ、ちと稽古なさらないと」

「や、どうも甚だ、以て」

「や、どうもぢやア御坐いません、明日から妾と一緒に店へ出て、萬事、見習ッて置いて下さい、お氣の毒ですが黒田さんにも、ねエ、かまひますまい」

「何、かまふもんか、なるほど彼奴は乃公よりも横着氣があッて世辭は宜いから、奴を店番にして乃公は臺所一切を受持たうかと、前夜そツと二人で相談して居ッた折柄だよ」

「ほ、ほ、一人で自炊などの時は兎も角、かりにも一家を構へた以上は、假令どんな事があッても良人、男の手を下すもんぢやア御坐いませんよ、臺所の事は第一、いくら器用にしても男は目に見えない徒費があッて、つまり不經濟になりますから」
「だらうなア、なるほど、いよく持て餘しもんだね乃公は、ぢやア一意専心、謹ン

で明日から店の方を熱心に」

「それも良人、わづかの間ですから、辛抱して下さい、實は、させたくないんですが、かういふ場合で、こゝが浮世ですさ、ね、また良人の方で、もう萬事が手に入つたから此ま、長く遣ると仰しやツても、妾の身が二個になつて産後の経過さへ濟めば決して、させて置きませんから、その代り赤ん坊の保母は良人にさせますよ、よろしいか、これこそ良人が不足の言へないこつてせう、しかし、その人並すぐれた大きな體軀で、こはく、赤ん坊を抱いたり脊負ツたりして歩く風が嚙をかしいでせうね、ほ、ほ、ほ、早く見たいことよ、ねエ、ほ、ほ、ほ、」

「はッは、は、は、片言でもいふやうになつたら、どんなもんだらう、乃公にでも、おとツちやんといふだらうか」

「知れたこと仰しやい、他人の子ぢやア御坐いませんよ馬鹿な」

「や、恐れ入つたな、此おとツちやん頗る閉口だ、呱呱の聲は正に上田力を」

「正に上田を、何ですと」

「いやさ、呱呱とは赤ん坊の啼く聲で、その聲が、乃公を、あゝ何だか變な心持になつた、とりも直さず乃公の子だねエ、その生るゝ子は、む、驚いたな、天この愚鈍漢をして子あらしむるたア、は、は、は、しかし可愛いだらうなア、なるべく男の子を生んでくれ、たのむぜ」

「男か女か妾の勝手に出来ませんよ、おや、あの聲音は黒田さん、もう良人この談話は止ませうよ、ねエ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、」

「は、は、は、は、は、は、」

人に過ぎたる機才はあれど所謂横才屈曲とて、その才は横に曲つて世間の調子外れ

に飛び出したる黒田健次、また人に過ぎたる高潔の風はあれど天真爛漫の度を越え過ぎて、その高潔は寧ろ當世の有無圓轉に叶はざる上田力、これに浮世の羽翼といふべき金を持たせて生涯さらに顧慮の念なからしめば、天晴れ揃ひも揃うて一流の男ながら、生憎金がなく運がなくて他人に使はるゝを嫌ひ身の切賣を厭へば、あはれ路地裏の泥溝板たゝいて渡る一文奴にも劣りて手も出でず足も出でず、萬事すること爲す事いちく／＼闇の夜の鐵砲玉、音ばかり高く響いて行方も知れぬ的外れに、今は我から身を縮めて一本の梢に冬籠る眼白の如く顔を見合はせつゝ、二間まぐちの小賣店に天下丸呑の面を揃へてお清に叱られながら、さア黒田さん五錢の煙草これですよ有難うと言つて丁寧にお渡しなさい、あれ良人まア何のこつてすよウその大きな體軀で突き當ツちやア店が潰れますと睨まれて、二人の大男うろ／＼狼狽へながら、恐縮、恐縮、

かねて頼み置きし横町の八百屋より五十あまりの婆も來りて、やう／＼馴れたる店の事は黒田と二人かはる／＼に持ち切りしが、かくても氣にかゝりてや滾るゝばかり重き身に店と臺所を差覗いて目を配りしお清も、きのふ今日は寢床を敷かせて打臥したる體、はや産聲の聞ゆる心地して上田先生さらに何事も手につかず、うろ／＼として狼狽へ、おろ／＼として立騒ぎしが、頃しも六月三日の夜も更け渡りし一時過、お清しきりに呻く聲を聞き付けて臺所の婆すでに釜の下を焚きかゝれば、上田力、さながら百萬の軍勢に押し寄せられし勇士の如く、がばと跳ね起きて二階へ駆け上りつゝ、「おい黒田々々、さア起きてくれ、で、出來るやうだ、起きろ／＼」

聲は潜むれども手は強く夜着を剥いだまゝ、またもや梯子段を駆け降りんとして大兵の忍び足、おもはず踏み込らしつゝ、どツと顛び落ちて腰骨したゝか打ちながら痛い

ともいはず、そのまゝむくりと起ち上ツて庭に飛び下り門の戸を引き開くるや否、かねて聞き覚え見届け置いたる産婆の許へ闇を冒し大地を響かして疾風の如く駆け出しぬ、
こゝ一生の大事と七町の間を韋駄天走りに宙を飛んで、産婆の門口を割るゝばかりに打叩きながら、

「来てくれ、来てくれ煙草屋の上田ぢや、えッ、ぐづくすると戸を叩き割るぞ、家でも何でも踏み潰すぞ、来てくれ、来てくれ」

さすがの産婆も慌て、起き出でつゝ、寢惚眼に門の戸を引き開けながら、おや闇いと提灯と呟いて内へ引き返さんとするを、この糞婆め何を吐すと叫ぶや否、元來の大力、ぬツと猿臂を伸ばして、横抱きに引ッ抱へたるまゝ、またもや闇を冒して驚き叫ぶも構はず一散に駆け出せば、をりしも夜警の巡查、はッと怪しみて横町より飛び出

しつゝ、こゝら待てと躍り来る胸邊どツと片手に突き仆して、見返りもせず馳せ歸りつゝ、

「さア連れて来た安心せい、まだかく、やア黒田め貴様ば、馬鹿な此場合に煙草を吹かす奴があるか畜生ぶんなぐるぞ、おい婆さん乃公の用は何だく」

やがて三十分ばかりの後、高く一聲、おぎやアと聞くと否、上田おもはず兩眼より狂喜の涙ほろくゝと滾して、果は一種言ふべからざる無量の感に打たれて堪へずやありけん、二十貫目の大男たゞ人なき片隅の暗闇に對うて、おいゝと泣き出しぬ、

うまれしは玉の如き男兒、母のお清が家鴨に似ず、父の上田が達磨に似ず、紅を注ぎし如きは臆て色白の天生、まだ整はぬ目鼻さへ口元さへ天晴れ美男の相を備へて、しかも體格は兩親の丈夫さをうけつぎ、世間なみくゝよりは大きく肥え太りたる體、あ

はれ此ま、何の支障もなく行末めでたく彌ましに榮え行きて、成長の後は無用の鈍物たる父の愚に倣ふなとて、その名を俊明とぞ名けぬ、

幸ひにして母のお清も産後の経過こゝに早く立ち、子は猶更ら蟲氣も無く、すやくと睡りて一點の邪氣もなく神の如き體を、父の上田は前後左右より差覗き差窺うて、たゞ頻りに満面の笑も漏らすのみ、そりやア良人の子ですよといはれて今更に容を改み、そつと抱いて御覽といはれても先生なかく恐れて抱き得ず、もし黒田が二階の昇り降りに足音あらく聞ゆれば、忽然その後より追ひ上つて物をも言はず胸倉ぐつと引ッ擱む勢ひ、臺所の備ひ婆が何心なく音させても、兩眼くわつと見開いて聲も出さず睨みつけける、

生るゝまでは世の諺、子は三界の首枷、さては我いよく浮世の深水に落ら入るかど、さながら敵に近寄る如く恐れしかど、さて生れし後は萬事さらりと打忘れて眼前の驚喜に手の舞ひ足の踏み處を外しつゝ、をりく庭前に顛け出すほどの上田力、今は川といふ字に寝る小唄より大男の身も軽く立騒ぐ體、いかにも呵しければ、お清おもはず吹き出しながら、

「さう良人のやうに朝から晩まで、まごくして居ちやア却つて赤ん坊が驚きますから、せめて一日、何處かで氣を落付けて在らッしやい、幸ひ濱町で早速良人、あゝいふ立派な祝儀を貰ったぎり、まだ其まゝお禮にも行かないでせう、今日は日曜だし、きつと御在宅ですよ、ねエ良人」

「さう和女、乃公を邪魔にしなくつても宜いぢやアないか、おとなしく靜肅にするから、このまゝにして置いてくれ、どうして一日も家外に出て居られるかい、馬鹿な、

乃公の子だアね」

「ほ、ほ、ほ、良人の子は分ッてますさ、しかし其子の御禮ですから、うツちやつても置かれませまい、ね」

「ぢやア仕方がない、ちよいと往ッて来よう、すぐ歸るよ、なるべく大切にしてお事に氣を付けて、第一あの黒田め、病氣あがりの瘦セツ法師の癖に、どうも嫌に違音の荒い奴だ」

「なアに黒田さんより良人の方が却ッて酷いことよ、いくら身を軽くして音はさせないでも、づしりりと床板に響き渡りますもの、まるで小さな地震ですワ」

「は、ほ、ほ、ぢやア兎も角、往ッて来るから、氣を付けろよ」

「此上に氣の付けやうがありますものか」

「いやさ、咳でも大きな咳をするなど言ふこツた、もし驚かして蟲氣でも出したら和

女どうする、乃公の子だぞ、ちよいと覗いて行かう、いや、よく寝て居るわい、古今名筆の畫と雖も更に及ばない赤ん坊の寝顔、神聖にして犯すべからずたア、眞にこれだよ、乾坤を巻き落さんとする賢哲の千萬言も、あはれこの嬰兒が無言に如かず、三軍を叱咤する英雄の憤怒も河童の屁だ、いつこに對うて發すべきや咄、あ、汝あるが爲に上田力こ、に死も辭せず、あ、汝あるがために上田力この後の浮世に水火の苦を甘んじて笑はん、ねエおい、乃公が斯う言ッてる事が夢にでも通じるだらうか、おとツちやんが今や將に出て行かんとするのを知ッてるだらうか、おや何だか目を動かして口元を、もが／＼さすぜ、腹が空ツたかも知れない、乳を遣れ、おい遣れといふに、和女だッて三度の食事はするだらう、おい遣らないか乳を」

「ほ、ほ、ほ、何ですよ、騒々しい、今しがた乳を遣りましたから、さうして良人、すやくくと心持よく寝てるんですよ」

大正十五年九月十五日印刷
大正十五年九月二十日發行



不許
複製

上田力

定價金壹圓八拾錢

特價 金壹圓貳拾錢

著者 村上信

著作權所有者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

發行者 加島虎吉

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 島潔

印刷者 島潔

印刷所 共同印刷株式會社

發賣所

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
住吉町二番地
東京市本鄉區
本富士町二番地

電話 大手一三三六番
振替口座東京一七四四番
電話 浪花一四九〇番
振替口座東京一六三六番
電話 小石川七五〇三番
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店

至誠堂第一分店

至誠堂第二分店

◇記念の爲◇
◇特價提供◇

浪六全集

袖珍箱入美本・新式ボイソニト組
定價各冊一金一圓八錢
特價各冊一金一圓二錢
(送料各十錢)

新裝

第一編	當世五人男	第九編	民家處世人間學
第二編	當世五人男 黑田健次	第十編	八軒長屋
第三編	當世五人男 上田力	第十一編	八軒長屋(後)
第四編	當世五人男 倉橋幸藏	第十二編	八軒長屋(續)
第五編	當世五人男 川上三吉	第十三編	仍如件
第六編	當世五人男 吉田雄藏 花車・しなさだめ	第十四編	當世三人兄弟
第七編	金剛盤	第十五編	元祿名物男
第八編	岡崎俊平	第十六編	毒婦

浪六全集

大衆文藝の先覺者浪六
先生の傑作揃い……
興味津津々々読む物

縮刷

◇全四十五卷◇
◇完 成◇

第十七編	男女の戦	第二十四編	稻田一作
第十八編	鬼あざみ 高倉長右工門	第二十五編	稻田一作(續) 煩悶病院
第十九編	原田甲斐	第二十六編	罵倒録 放言録
第二十編	無遠慮	第二十七編	天眼通(前)
第二十一編	元祿十年女 明治十年女	第二十八編	天眼通(後)
第二十二編	當世女	第二十九編	川徳
第二十三編	豊太閤	第三十編	牛肉一斤

浪六全集

組トソイボ式新・本美入箱珍袖
 錢十八圓一金 册各 價定
 錢十二圓一金 册各 價特
 (錢十各料送)

第三十一編	裸體の人間	第三十九編	裏と表
第三十二編	無名の英雄と 失敗の英雄	第四十編	裏と表(續)
第三十三編	出放題	第四十一編	蔦の細道 八重の潮路
第三十四編	夜叉男	第四十二編	浮世車
第三十五編	うきよ草紙	第四十三編	うき舟
第三十六編	武士道	第四十四編	元祿四十七士
第三十七編	武者氣質	第四十五編	大正五人男
第三十八編	十文賊		

550
574

Handwritten scribbles and numbers, possibly including '208' and '1-0-3'.

終

